

聖霊降臨後第21主日 ルカ17章11―19節

〔新共同訳〕

11 イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。12 ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、13 声を張り上げて、「イエスキさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。14 イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行つて、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。15 その中の一人は、自分がいやされたのを知つて、大声で神を賛美しながら戻つて来た。16 そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。17 そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。18 この外国人のほかに、神を賛美するために戻つて来た者はいないのか。」19 それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がつて、行きなさい。あなたの信仰があなたを救つた。」

〔直訳〕

11 そして 起こつた 行くときに エルサレムの中へと、
そして彼は 通つて行つた サマリアとガリラヤとの間を。

12 そして 彼が入るとき ある村の中へと
出会つた 「彼に」 十人の 重い皮膚病の 男たちが、
ところの 立つていた 離れて。

13 そして 彼らは あげた 声を 言いながら、
「イエスよ 上の方よ、 憐れんでください 私たちを。」

14 そして 見て 彼は言つた 彼らに、
「行つて 見せなさい 自分自身を 祭司たちに。」
そして 起こつた、 彼らが出て行く間に、
彼らは清められた。

15 だが一人が 彼らのうちの、
見て 彼がいやされたことを、
戻つた 大きな声と共に、
栄光を帰しながら 神に。

16 そして 彼は伏した 顔を 彼の足のわきに
感謝しながら 彼に。

17 だが答えて イエスは 言つた、
「十人が 清められたのではないか。
だが九人は どこに。」

18 見られなかったのか 神に栄光を与えるために戻つた者たちは

この異邦人以外は」

19 そして 言った 彼に、

「立ち上がって 行きなさい。 あなたの信仰が 救った あなたを。」

①エルサレムへの途上（11節）

㉑ 「そして起こった エルサレムの中へと行くときに：」

㉒ 「そして起こった：」という言い回しはルカの好む構文。これを用いてエルサレムへ向かう途上の出来事であることを強調している。エルサレムを目指すイエスの旅は9章51節から始まるが、13章22節と17章11節でも、「エルサレム」に向かう旅であることが明記される。17章11節からは、旅の第三幕が始まる。

㉓ 9章51節以下では、イエスたちはサマリア人によって拒絶される。13章22節以下では、神の国に入るのはユダヤ人ではなく、異邦人であることが述べられ、17章11節以下では、十人の重い皮膚病を患っている人の中で、サマリア人だけが神を賛美するために戻り、救われたと述べられる。

㉔ サマリアとガリラヤの間の村

㉕ エルサレムを目指す旅の第三幕では、「サマリアとガリラヤの間」の村が最初の舞台となる。このような場所が選ばれたのは、サマリアが「異邦人世界」の象徴ともなっているからである。紀元前七二二年にアッシリアはサマリアを征服し、諸国民の入植を行った。イエスの時代、人種的にも文化的にも混血が進んでいたサマリアは、純血を重んずるユダヤ人から見れば、異国の民に等しい存在であった。ルカによれば、エルサレムに向かって歩むイエスは、ユダヤ人だけでなく、異邦人のためにも十字架の上でゆく。この旅の頂点はエルサレムの死と復活にあるが、この復活の主は「全世界」への宣教を指示する主でもある。

㉖ 11―19節は三つの段落に分けることができるが、その最初と最後に「サマリア」と「サマリア人」という語が置かれている。イエスのエルサレムへの旅の目的が、異邦人の救いのためでもあることが、このような言葉の配置によっても示されている。

②清められた十人（12―14節）

㉗ 重い皮膚病

㉘ 「重い皮膚病の」と訳した語はレプロス。新約聖書では9回、共観福音書にだけ使われる。重い皮膚病を患っている人はイエスにいやしを求める人物として登場する（ルカ一七12、マコ一40、マタ八2）。レビ記13章の規定によると、重い皮膚病にかかった者は、宗教的に汚れた者と見なされる。祭司から「あなたは汚れている」と言い渡された患者は、ユダヤ人の共同体から隔離され、町の外に一人で住まねばならず、歩くときも「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と叫ぶ必要があった（レビ一三45―46）。イエスが村に入ろうとしたとき、十人が「離れて立っていた」のは、彼らが村の外に隔離されていたからである。

㉙ 症状がおさまり、祭司に体を見せて「あなたは清い」と言い渡されるまで、患者は共同体に復帰することができない。そこで、十人の患者をいやそうとするイエスは、「行って、祭司たちに自分自身を見せなさい」と指示することになる（ルカ一七14、マコ一44、マタ八4も参照）。ルカ四27では、預言者が自分の故郷で歓迎されないと述べたイエスが（四24）、預

言者エリシヤの時代の故事を引く。エリシヤの時代のイスラエルには「重い皮膚病を患っている人」が多くいたが、シリア人ナアマンのほかは誰も清くされなかった(王下五1―27)。

㉞ 投獄された洗礼者ヨハネは弟子を遣わし、「来るべき方は、あなたでしようか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」と尋ねさせる。イエスは彼らに「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい」と命じてから、イザヤ書を引用して(イザ二六19、二九18、三五5以下、六一1など)、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」と言う(マタ一5、ルカ七22)。ここにあげられている奇跡は、メシアによる救いの時のしるしとして、ユダヤ人が待望していたことである。

㉟ イエスは十二人を派遣するさいに、汚れた霊に対する権能を彼らに授け、「病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい」と命じる(マタ一〇8)。「天の国が近づいた」という知らせは(マタ一〇7)、遣わされた弟子たちの働きを通して、宣べ伝えられていくことになる。

㊀ 「そして、彼らは声をあげた。『イエスよ、師よ、私たちが憐れんでください』と言いなながら」
㊁ 「師」。原語はエピスタテース。元の意味は「上に立てられている人」であり、「首長・頭・監督」を指す。この呼称は新約聖書ではルカにのみ、7回現れる。この他の箇所では、イエスの弟子だけが用い、イエスへのある程度の信仰を示す(ルカ五5、八24・45、九33・49)。共観福音書の並行箇所では名詞ディダスカロス(先生)の呼格が使われている)。

㊂ 「声をあげた」は祈りを意味している。主に向けられた叫びは祈りでもあるからである。祈りを祈りとするのは、「主に向かう」という姿勢にある。イエスはそれに「祭司たちのところに行つて、自分自身を見せなさい」と応える。彼らはイエスの言葉に従い、出て行くが、その途中で彼らは「清められた」ことを知る。多くの奇跡物語はこのいやしの場面で幕を閉じるが、この物語はさらに展開し、たった一人の人が示した反応を描いている。

㊃ 「そして起こった、彼らが出て行く間に、彼らは清められた」
㊄ 「そして起こった…」という構文は11節にも用いられている。この強調構文によって、イエスによる清めの奇跡に注目させる。12―14節はいやしの奇跡を描写しているが、他の奇跡物語とは違つて、奇跡をもたらす動作については何も書いていない。イエスは「祭司に自分自身を見せなさい」と指示するだけである。イエスは遠くからでも、奇跡を実行することができる。ここでは示されている。

③ いやされたことを見たサマリア人(15―19節)

㊅ 「彼らのうちの一人が、彼がいやされたことを見て、戻つた」

㊆ この段落では、「彼らのうちの一人」と残りの「九人」とが明確に対比されている。「彼らのうちの一人」は、神に栄光を帰しながら「戻つて」、イエスに感謝しながら「ひれ伏した」が、そのきっかけは「いやされたことを見て」ということにある。

㊇ 「いやされた」ことと「清められた」ことが同じ意味であるなら、残りの「九人」も知っていたはずである。「十人は清められた」のであり(14節)、17節でも「清められたのは十人ではなかったか」とある。しかし、「いやされた」ことを「見た」のは十人のうちの一人だけである。だとすれば、イエスのもとに戻つて来たたった一人は、「清くされた」という

こと以上の何かを見ているはずである。そうでなければ、残りの九人とは別の行動を取らなかったに違いない。

㊦ たった一人の人が「見た」ものは、清くされた患部の向こうに働く憐れみの手である。彼は「清くされた」だけでなく、「いやされたこと」をも見た。ルカが動詞を「清くされた」から「いやされた」に変えたのは偶然ではない。ここでの「いやす」は、私たちの「いのち」に無関心ではいられない神の憐れみとの関わりを表している。神との関わりに気づいたので、彼は自然と体の向きを変え、イエスを通して働く神の憐れみを賛美し、イエスに感謝するために戻って来たのである。

㊧ 15節では「彼らのうちの一人」とあるだけだが、16節になって初めて、彼が「サマリア人」であることが明らかにされる。それによって、物語は緊張をはらんだものとなる。

㊨ 「だが九人はどこに」

㊩ 17―18節のイエスの言葉は、「十人が清められたのではないか」「だが九人はどこに」「神に栄光を与えるために戻った者たちは、この異邦人以外は見られなかったのか」という三つの修辭的疑問文から成り立っている。この中で特に注目されるのは二番目である。「どこに」は疑問詞であるから、文頭に置くのが普通であるが、ここでは最後に置かれている。これは「九人と一人」の対比を浮き彫りにし、その「一人」が「異邦人（非ユダヤ人）」であったことを強調するためだと思われる。

㊪ 救いとは「清くされた」だけでなく、「いやされている」ことに気づくことである。奇跡は救いへの入口でしかない。憐れみを見て、神との交わりに入るときに、救いは完成する。そうであれば、イエスが「九人はどこに」と尋ねたのは、彼らを非難するためではなく、救いの入口に立っている彼らを真の救いへと招き込むためである。

㊫ 残りの九人もイエスの指示に従順に従い、清くされた。しかし、「いやされたこと」は見落としている。信仰とは、清くされた患部の向こうを見る目のことであり、その目が神との交わりに気づかせる。だから、イエスは「あなたの信仰があなたを救った」とサマリア人に述べたのである。イエスのもとに戻らなかったユダヤ人もイエスの指示に従う従順さを持っているが、一人のサマリア人のような「信仰」は持っていなかった。両者のこの違いを示すことがこの物語の主題であるだろう。

④ルツ1章8―19節

15 ナオミは言った。

「あのとおり、あなたの相嫁は自分の民、自分の神のもとへ帰って行こうとしている。あなたも後を追って行きなさい。」

16 ルツは言った。

「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。

わたしは、あなたの行かれる所に行き

お泊まりになる所に泊まります。

あなたの民はわたしの民

あなたの神はわたしの神。

17 あなたの亡くなる所でわたしも死に

そこに葬りたいのです。

死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなただを離れるようなことをしたならば、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」

18 同行の決意が固いのを見て、ナオミはルツを説き伏せることをやめた。19 二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた。

㉑ ルツ記1章の概要

㉑ ナオミの夫はエリメレクであり、この夫婦には二人の息子、マフロンとキルヨンがいた。この一家は国を襲った飢饉のために、ユダのベツレヘムから死海東岸のモアブに移住するが、エリメレクは家族を残して死んでしまう。二人の息子はそれぞれモアブの女性、オルパとルツを妻とするが、子供が生まれる前に、彼らも死んでしまう。

㉒ そのため、飢饉が終わったことを知ったナオミは、国に帰る決心をする。その際、ナオミは二人の嫁に里に帰るように諭す。オルパはそれに従ったが、ルツはあくまでも同行を望むので、ナオミはルツを連れて、国に戻ることにする。

㉓ ナオミと二人の嫁の会話

㉓ ナオミと嫁との会話が3回繰り返されるが、これが1章の中心となる。1回目の会話では、ナオミは嫁たちに自分の里へ帰ることを勧めるが、二人は残ると言う。2回目もナオミは帰るようにと促し、オルパは帰って行く。3回目にナオミはルツにオルパと一緒に帰るようにと諭すが、ルツはナオミに同行する決意を示す。

㉔ この会話の理解する助けとして、古代イスラエルの社会習慣を把握することが必要である。2回目の会話でナオミは自分に子どもが生まれる可能性はないと語るが、この背景にはレビラト婚という規定がある。レビラト婚とは、子どもが生まれずに、夫と死別した女性は、夫の兄弟の妻とされ、子孫を残すというものである(申二五5-10)。ナオミは将来子どもが生まれる可能性はなく、レビラト婚の可能性もないことを示し、二人の嫁を説得する。

㉕ 親族の義務を果たす

㉕ 1章の終わりで、ナオミはルツを連れてベツレヘムに帰る。2章に入ると、ボアズという人物が登場する。彼は、ナオミの死別した夫エリメレクの一族にとつて「有力な親戚」であった。ルツはこのボアズの畑で落ち穂拾いをするのを許される。レビ記19章9-10節には「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、摘み尽くしてはならない」とある。畑やぶどう畑を刈り尽くさないのは、貧しい者、寄留者、孤児、やもめの生活を守るため。社会の弱者の命を守ることは神の願いとして守られていた。

㉖ ナオミは、ボアズのことを「縁続きの人であり、わたしたちの家を絶やさぬようにする責任のある人の一人」であると語る(二20)。4章14節でもボアズは、「家を絶やさぬ責任のある人」と呼ばれているが、この言葉はヘブライ語では、ゴーエールという名詞であり、基本的には「親族としての義務を果たさねばならない近親者」を意味する。

㉗ 古代イスラエルにおいて「親族の義務」とされる行為は多岐にわたるが、ルツ記に關係する義務は次の二つになる。

(1) 親族が売りに出した土地を買い戻す義務

(2)子供に恵まれる前に夫と死別した妻を夫の近親者が娶らねばならないという義務

㊤ エリメレクの一族にとってボアズよりも近い親戚がいたが、彼がこれらの義務を果たすのを拒絶したので、ボアズがエリメレクの土地を買い、ルツをめとることになった。こうして、ボアズとルツの間に生まれた子どもを通して、エリメレクの名が嗣業の土地に再興されることになる。ボアズとルツの子、オベドからエツサイが生まれ、エツサイからダビデが生まれる。ルツの名はイエスの系図にも記されている(マタ15)

㊤ ルツのナオミへの従順と神からの祝福

㊦ ルツはナオミに「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください」と訴え、どこまでもナオミと共に行き、「あなたの亡くなる所でわたしも死に、そこに葬られたいのです」と決意を語る。このとき、ルツは「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神」と告白している(16―17)。ナオミから離れることのできないルツの強い思いから、ルツは「自分の民、自分の神」を離れ、ナオミの信じる神との交わりに入れられていく。

㊧ ルツは何も持たずに、ナオミにただつき従うことによって、イスラエルの神の導きへと身を委ねることになる。異邦人であっても、誠実に神を求める者には、豊かな祝福が与えられることがこの書では語られている。

⑤ 神の救いにあずかる

㊨ ルツは自分の神を離れ、ナオミの信じる神を信じる者となった。子どもを授かったルツは、ナオミと共に神の祝福に満たされ、人々からも祝福を受ける。神の救いは異邦人にも及ぶ力にあふれている。救いを受けるために必要なことは、神の導きが常にあることを信じ、身を委ねることである。ルツ記は、イスラエルの神を信じ、すべてを神に委ねる者は、だれであれ、異邦人にも神の慈しみと祝福が与えられることを語っている。

㊩ 重い皮膚病を患っている十人の人たちも、「わたしたちを憐れんでください」とイエスに叫び声を上げた。人が祈るのは、自分を苦しみから救う力が自分にはないことを知っているからであり、神に助けを祈るとき、人は自分を神に委ねているのである。そのような人に救いは神から差し出される。彼らの救いを願うイエスの言葉によって、十人が清められた。しかし、ただ一人のサマリヤ人を除いて、残りの九人はイエスのもとに戻らなかった。九人は重い皮膚病の患部が治ったことは知ったが、その出来事の背後で働く神の姿にまで目を向けることができなかった。

㊪ 病の治癒という同じ出来事に出会っていても、その出来事の向こうに神を見る目を持つことがなければ、救いにあずかることはできない。その人の命を心にかけて、生かそうとする神の思いに気づくこと、神からのいやしに気づくことが救いである。奇跡は救いに気づくための入口でしかない。イエスは言葉だけで、十人を清めたが、それはイエスと共に働く神の力に目を向けさせるためだろう。

㊫ 神の差し出す救いの手に気づくとき、人は神を賛美し、イエスに感謝をするという生き方へと向けられていく。イエスがもたらす救いは、人間の資質や努力とは無関係である。救いから遠いとされていた異邦人も、自分に働きかける神の手を見つめる「信仰」という目に恵まれるなら、生きる向きを変え、賛美と感謝のうちに生きることになる。